

発達障害のある人が安心して地域で暮らしていく上で必要な取り組みについて ～出生時期から学齢期までを中心に～



田んぼに水が満ち、蛙の大合唱が聞かれる5月17日に第167回障害者地域生活支援研究会が開催されました。今回のテーマは「発達障害のある人が安心して地域で暮らしていく上で必要な取り組みについて～出生時期から学齢期までを中心に～」でした。

今回、コーディネーターとして、北九州市発達障害者支援センター つばさ 所長 酒井一栄さんに進行をお願いしました。



しんちゃん

発言のトップバッターとして、今年度から新たに障害福祉部へ発達障害ラインが設置され、その初代課長を務められることになった坂元光男さんより“発達障害ライン”を設置した目的についてお話をしました。今まで、幼児期は「子ども家庭局」、学齢期は「教育委員会」、青年期以降は「保健福祉局」と、ライフステージで異なる部署が支援してきましたが、行政の縦割りの垣根を越えて“発達障害”というラインで一つにまとめ、支援する体制が整ったことで、今後に期待したいところです。全国的に見ても複数の部署に渡るラインは、珍しい取り組みだそうです。

発達障害担当職員さんは12名。事務担当職員さん、保育士さん、保健師さん、学校の先生と幅広くバラエティに富んでいるんだって。心強いね♪

続いて、引野ひまわり学園 園長 山下満代さんからは、「みなし期間はありながら今回の自立支援法改正に伴い、これまでの幼児通園施設の役割から児童発達支援センターに変わり、外来相談や幼稚園や保育所などへ専門的な支援をこれまで以上に進めていく必要がある」との説明がありました。

次に、北九州市自閉症協会 事務局長 伊野和子さんからは、「家族は障害受容と言われても受け止めることが難しく、実際の係わり方で子どもさんが安定したり、落ち着いていく姿を見ることで受け止められることが多い」とのお話しが印象的でした。

同じく親の会の北九州市自閉症児者の未来を考える会 会長 森山謙治さんからは、会でまとめられた『私たちの問題意識と、多くのみなさんのために望むこと』と題して、「発達支援センターの更なる強化が望まれる」と言った発言を頂きました。

また、北九州LD等発達障害親の会 事務局長 柴崎章子さんからは、スライドを使いながらバス乗車のエピソードから、いかに係わる周囲の方の理解が必要であるかといった発言が印象的でした。

当日は今回発達障害ラインに新たに配置された「こども家庭局」、「教育委員会」の課長レベルの皆様にもご参加頂き、それぞれの部署での課題と今後取り組んでいきたいと考えられている内容について、各々の立場から貴重な発言を頂きました。

今回の参加者は96名で、前回の行政としての新規事業をテーマとした回を超える方達に参加して頂きました。あらためて新たにできた発達障害ラインへの期待がとてもの大きいことが分かりました。しかし、実際にはこれから取り組みの始まりで、行政ラインの縦割りから横断的な取り組みへの期待は、これまでも希望されていたことでもあり、言わば“やっとスタートラインに立てた”ところです。そのため、発達障害を軸にして行政の横の繋がり強化と共有化、民間も横の繋がり強化と共有化、そして官・民一体となったライフステージに沿った本人・家族が望む暮らしに繋げていくには、今後いくつものハードルがあるとは思いますが、当市が発達障害があっても暮らしやすい町になることが、何より期待されることです。

参加者96名の内、45名の新規の方にご参加頂きました。ありがとうございました。今後も顔の見える研究会を目指し、皆さんが気軽に参加できる当研究会でありたいと思います。

来月も多種多様な発言者の方をお迎えして発達障害をテーマに開催します。みなさんのご参加をお待ちしています。



※こちらの議事録は北九州市障害者自立支援協議会のホームページでもご覧いただけます。

<http://kitakyushu-net.shien-c.com/>



けんたくん

北九州には発達障害に関わらず、子育てに関する相談窓口もあるよ。このことをみんなに知ってもらいたいなあ。まずは声をあげて相談してみる勇気が大事だね♪